講義の風景

文学部
中村昇教授
Noboru Nakamura

「哲学」

［木曜日1限／文学部1−4年生対象］

1限はこたえる。ぽつぽつと、遅れて入室の学生もいますねぇ。大教室だけど、教壇の前に置かれたレジュメをとりに行かねばならないから、いやでも目立つ。

「きょうは遅刻が多いよね」

先生は明るい調子で声をかけた。

「どうもすみません」

痛み入る殊勝な姿に、先生は、

「どういたしまして」

ざっくばらんに、とてもフツーな雰囲気なのである。

「お、××君じゃないか。珍しいね、きょうは」なんて、授業中にも学生との会話を楽しむように。

ゆとりの空気とは裏腹に、講義の中身は、現代思想・哲学の最先端、

「ジャック・デリダ」

である。難解の代名詞のようなデリダが、フツーの言葉でどうほぐされるのか。これはちょっとぜいたくな講義、そんな気がしてきた。

日常の思考揺さぶる「哲学の快感」
ゆとりの教室で現代思想の先端へ

「息子の名前は…」

——暮れも押しつまった昨年12月15日、年間講義の締めくくり。

授業のマクラに、本の紹介がある。

「いま読んでいる本や参考図書を、毎回話すようにしている」そうだ。神智学のR・シュタイナーと民俗学者・南方熊楠に関する3、4冊。シュタイナー教育を体験した子安美知子著『ミュンヘンの小学生』、また松居竜五著『南方熊楠　一切知の夢』……。

「おれの受けてきた教育は何だったのか。これこそが教育だ、と泣きました」という解説にほだされて、後日『ミュンヘン——』を読んだ私も、感激にむせびました。にもまして、ミナカタ・クマクスへの傾倒の深さである。「長男の名前を知りたい？

＜南楠（みなくす）＞です。命名は、父親の特権でね」

熱い、思いほとばしる先生である。

なかむら・のぼる　1958年生まれ。中央大学文学部卒。同大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程単位取得退学。文学部哲学科専任講師、助教授をへて、05年から現職。専門は西洋現代哲学。ヴィトゲンシュタインを中心に研究している。

言語とは何か
「デリダVsサール論争」

「差延」「現前性」「脱構築」……なんだソレ、と聞いただけでつまずく人もいれば、だからこそオシャレという吸引度もまた強い。構造主義に代表される現代思想、フランス発の知の潮流。日本では、ニュー・アカ（デミズム）、ポストモダン思想とも呼ばれて、（19）80年代には「知のファッション」ブームを呈した。らしい、と世代的には伝聞でなぞるしかないのだが。

デリダはそのなかで、ポスト構造主義の代表的な哲学者として知られる。

言語の本質とは何か。締めくくりの講義は「デリダVsサール」論争を介して進む。サール、その師であるオースティンの言語論から。

「たとえば、『雨が降っているね』という言葉を発したときには、その背景には『雨は嫌だね』とか、『傘をささなければいけないね』といった感情を伴っている。だから語や文

表情豊かに…中村昇教授

は、事実を記述しているわけではない、というのがオースティンの主張です」

なるほど、特に行間を読み、相手の感情を汲み取る文化をもつ日本では、背景にあるものこそが重んじられることも多々ある。さらに、オースティンは「言語というのは行為であり、発話することによって周囲に影響を及ぼすのだから、誠実さがないものは言語ではない」と考えた。〈言語行為論〉と呼ばれる。

たとえば「結婚します」と約束した素敵な異性がいるとして、本当に結婚しなかったら、その「結婚します」という言語は「行為として成立しない不誠実なものなので、言語ではない」とオースティンに言われてしまうだろう。

同じように、舞台上の役者の台詞や詩の朗読なども、実際に行為として成立しないので「逸脱している」とみなされてしまう。

この主張に噛みついたのがデリダであり、言語の本質をめぐって亡きオースティンの弟子であるサールとの論争になった。デリダは、「オースティンは言語が単に記述的なものではないと主張しているにもかかわらず、言語に誠実性を必要としている点が矛盾している」と指摘した。

言語の成立に、誠実さが必要ということになると「誠実なもの＝言語」と、「誠実でないもの＝言語ではない」という不毛な二項対立をつくりだしてしまう。言葉の背景にあるものから言葉を理解する、という主張とも一致してないよン、おかしいじゃないか、とケンもホロロにやっつけた。「デリダはサールの論文を一言一句完全に否定しました。それこそ署名から（笑）」。論争のけたたましさもフランス思想界の名物らしいのだけれど、わけてもデリダは激しい人みたい。

差延・痕跡…すべてはコピー

では、怜悧な論理をもってするデリダの言語論とは？　言葉は繰り返されることによってその本質を変化させる、それこそが言葉の本質であるという（＝反復可能性／反覆可能性）。この意味では、オースティンが「逸脱」とした役者の台詞や詩の朗読こそ本物の言語だということになる。

かみくだいた説明が続く。「デリダは、いま・ここに・あるという〈現前性〉は絶対につかむことができないと考えた。つかむことができるのは〈差延〉（デリダの造語で、①違いがある②遅れるという意味をもつ）の結果ででてくる〈痕跡〉だけだと言うんですね」

つまるところ、「オリジナルなものなんてこの世にはない。すべてはコピーだ」というのがデリダ哲学の核心のようだ。いま、私たちがつかっている言葉・表現も、誰かから聞いたものかもしれないし、どこかで読んだものかもしれない。でも、その前の誰かも誰かに聞いたかもしれない。起源をさかのぼってみても、オリジンにはついに到達しない。「コピーが既につねにある」。つまり、言葉は誰のものでもあり、誰のものでもない、というふうに。

すべてはコピーだとすれば、あるのはただ「引用と反復」「差異の戯れ」……というふうにつながっていくのかな。

「ここには、プラトンからヘーゲルに至る西洋哲学の体系批判という文脈もあるわけですがね」と、小さな注釈もあった。だから、極論になっ

ている部分もある、ということだろうか。

デリダはダレダ!?

「テクスト論」というのを耳にしたことがある。書かれた作品（エクリチュール）は、作者のモチーフなんか関係ない、もっぱら物語構造を論じるべきだとする文芸理論で、これもデリダの議論などから生まれたようだ。いわゆる〈作者の死〉だが、自決した三島由紀夫から離れて、『豊饒の海』を読むべきなのだろうか。「輪廻転生」他の〝説話論的構造〟を冗舌に論じるよりも、１９７０年11月25日朝、完結編の第４巻「天人五衰」の最終章稿を編集者に渡して自衛隊市ヶ谷駐屯地に向かった三島の内面とも重ねて読んだほうが、よほど〝豊饒〟ではないだろうか。そう思ったりする。すべては表現主体なきコピーというなら、本家本元が、

「デリダはダレダ」

とならないかしら、なんて。

門外漢がそんな質問をする勇気はなかったけれども。

うっとり、グラグラ

オースティンの「言語行為論」を聞けば、ああそうよね、と思い、デリダを聞けば、なるほどなぁアタマいいんだ、とうっとりする。グラグラ揺れる。先生の講義がくっきりと分かりやすいせいである。

前期の授業では恋愛がテーマだったそうだ。ぜひ聴講して、恋愛論でもグラグラ揺れてみたかった。

グラグラさせる、日常的な思考と身体を。それが、「哲学の快楽」なのかもしれない。

授業の終わり。先生の明るい声が教室にひびいた。

「１月の後期テストの問題は、①恋愛②時間③言語④その他。どれでもいいよ、自由に選んで論じてください」

「恋愛」を選んで、１行、「語り得ぬものについては沈黙しなければならない」（ヴィトゲンシュタイン）と書いただけでは、ペケでしょうねぇ。

（学生記者　植松歩美＝総合政策学部３年）

Hakumon ちゅうおう

1～2年生
学生記者募集

ジャンルの
あらゆる取材現場へ
マスコミに通用する取材力、
文章力を鍛えます

募集人員　若干名
課題作文　「私のとっておきの話」、「『Hakumonちゅうおう』を読んで」（どちらでも。800字）
締め切り　４月末日（先着優先）

問い合わせ
中央大学広報課
『Hakumonちゅうおう』編集室
042－674－2146
rtaro@tamajs.chuo-u.ac.jp（編集専任：田中）